



# 木之本LC 40周年記念事業 終わる

5月8日

## CN四十周年記念を終えて

L 橋本圭祐

CN四十周年を無事、大過なく終えることが出来たことは会員各位、又関係者の多大なご支援とご理解の賜ものであると、まずもって厚く御礼申し上げます。私がライオンズに入会したのは、昭和六十二年二月で、あれから約二十年近い年月が過ぎましたが、なんとなく過ぎてきたこともあり、私にとつて、四十周年会長という重責を全う出来るのか、大変不安でありましたが、メンバー、役員、事務局の皆様が、一丸となつて協力して頂いたことが、良い結果を生むことになつたと深く感謝申し上げる次第であります。我々ライオンズクラブは四十周年に当り社会にどう奉仕するのか、何を行動すべきか、何を訴えるかということに、長く深い討議が行われ、人間の生命、生存の中で最も大切であり、次代の人々のためにも、環境問題をテーマに事業を展開すべきであるという結論に至り、事業方針をまとめるに当り、大変有意義な意見の交換をすることが出来、理念と行動がしっかりと根づいた事業になつたと思っております。はんのうらの里山修景事業は我々に、里山保全の大切さと、行政許可の難しさと、維持保全のむづかしさを教えられ、又びわこ汽船ピアンカでの、奥琵琶湖周遊と式典、交換会は、来賓の皆様には、竹生島の川鶴の被害による山林の荒廃と、はんのうら湾、特に月出村から、つづら尾崎までの新緑の美しさは、人々に体験視覚でもって改めて環境保全の必要性を訴えることが出来、我々の思いは多くの方々の共感を得たものと確信しております。アメリカ、マイクロソフト社のビルゲイツ氏は奉仕は最高の贅沢であると言っております。どんな他の贅沢をしても、奉仕程喜びと充実感、満足感を得るものはないということであるのであります。そんな贅沢をさせて頂けるのもライオンズのおかげであり、家族の支えのおかげであります。どうか、四十周年記念事業を通じて、一年間燃やし続けて頂いた情熱を更に持続発展して頂きまして、又今年度、中川会長のもとで更に充実したライオンズ運動が展開されますようお願いします。私に賜りましたご厚情に對しまして、深く感謝の意を表しまして、ご挨拶にかせてさせて頂きます。



## 四十年を振り返って

L 平井 清

先ず、大変立派なクリスタルの楯をいただきまして身に余る光栄です。一家の宝として永遠に残しておきたいと思っております。さて、一九六五年五月五日に県内各クラブの祝福を受け、富田会長以下二十七名が厳かにチャーターナイトを執り行いました。言うまでもありませんが、例会は「国旗に敬礼」に始まり「国歌斉唱」を致しますが、これは大変重要なことで、どの国のライオンズでも行われていると聞いております。

昨今は我国を囲む情勢が大変厳しく、今こそ我々ライオンズが毅然と立ち上がり、「国威発揚」をうながし、二六〇〇有余年の輝かしい歴史ある日本の姿を世界に見せねばなりません。

四十年前木之本LCが出発した時、全員に国旗が渡され、祝日には必ず「日の丸」の国旗を玄関に掲げました。この非常な時、我々ライオンズは、「日出る国」の象徴である「日の丸」を高々と揚げようではありませんか。今は祝日が多くありますので、できればクラブで国旗を斡旋していただく等、二度「検討」くださると良いと思います。

## 四十年を振り返って

L 田中達雄

振り返って見ますと、昭和三十九年六月にメンバー十九名にて木之本ライオンズクラブを結成し、翌四十年五月五日に認証状伝達式が行われその時のメンバーは二十七名でした。現在では結成時のメンバーは小生二人となり又チャーターメンバーもL平井と小生の二人で大変淋しい思いが致します。

当時の例会場は滋賀銀行木之本支店大会議室で、例会だけではなく色々と趣味部会がありダンス教室等もありました。又家族同伴の旅行例会には殆どの家族が参加し、楽しかったバス旅行等今も脳裡にのみがえって来ます。当時小学生だった子供達も今では五十才前後の成人で社会で活躍している。こうした事を考えると自分が今年傘寿と云う年を迎えた事は当然のことだと思えました。「光陰矢の如し」四十年と云う歳月が何時の間にか過ぎ去り、木之本ライオンズクラブもオギヤと生れてすでに四十年という歴史と伝統のあるクラブになりました。今後は、この歴史と伝統を守り、一層の発展を願うものであります。



▲二人の受賞記念写真

## CN四十周年記念事業を終えて

CN四十実行委員長 L 竹中一雄

荒天などで記念式典祝宴会場となるピアンカが、長浜に寄港できないような事態になったら、思えば大きなリスクを背負った企画でありましたが、予定とおり終了できましたことに安堵いたしました。

本来の実行委員長であった故L谷口安志が、記念式典が無事終了したことを見届けたように、逝去されました。葬儀当日ご霊前にCN四十周年特別記念誌をたむけ、報告とご加護に感謝の意を表した次第です。

今回の行事では会場確保が最大の難関でしたが、各位の英知のもと印象に残る催しになったと自画自賛することをご容赦ください。

特に記念事業につきましては、部会のメンバーはいうまでもなく建設関係のメンバーに限られた期間と厳しい予算でありましたが、誠意ある施工をしていただいたこと、芝張りや植樹に多数のメンバーのご協力を得たことに深く感謝いたします。

『ふれあいの森はんのうら』の石碑も建立され、記念樹のメタセコイアをメインに、従来からある桜の巨木や新たに植樹したしだれ桜や紅葉が四季折々の風情を醸し出すことを楽しみに継続した管理にご協力を賜り、研修旅行で見学した藤枝市民の森も参考にしながら周辺も整備し地域の住民や子供たちと自然を介した交流を図り、自然との共生を目指した活動拠点となりますようお願いしております。

最後に、各部長を中心に全員参加の記念事業を終了出来ましたことに厚くお礼申し上げます。

## CN四十周年記念事業 「ふれあいの森はんのうら」の森

事業委員長 L 谷口武男

平成十六年度はCN四十周年という節目に当たり記念事業の決定には頭を悩ませました。議論を重ね、最終的にライオンズクラブのスローガンでもある「社会奉仕活動」と言う点に重きを置き絞り込まれていった案でありました。当初は「ライオンズの森」と仮の名称を付けまさに手探り状態からの始まりでした。敷地の選定、確保と難題は次々に出てきます。里地、里山を整備し有効に活用しよう、大きな構想の下に出発したもののとっかかりが無く行き詰まった時期もありました。

不思議なもので場所が決定し現況が見えてくると、ゆつくりですが着実に「森の整備」と言う目標地点に向かって動き出して行つたのです。それは全て委員さん方の行動力と責任感のなせる技なのだと思ふいたしました。そして「ふれあいの森はんのうら」と命名され五月八日には来賓の方々はじめ皆さんにお披露目することが出来、また予想以上の賛同の声を頂き本当はとど致しました。

しかしその場所へ托した我々の思いは、今年度が終了したからと言って完結するものではありません。記念すべき第一歩をあの満開の桜の下から踏み出しただけのことなのです。敢えて継続を必要とする記念事業に決定したのは非常に意義深い事だと考えております。次の年、その次の年へと引き継いでいく過程の中で、これから先の地域における木之本ライオンズクラブの別の在り方が見いだせるのではないかと密かに期待しております。『We Share』の言葉を胸に刻み付けて小さな苗木を育てて行って欲しいと願ってやみません。

最後に、忙しい合間を縫って現場に駆け付け、整備工事に取り組んでくださった方々はもとより、この事業計画を支持しご尽力いただいた皆様方に、紙面をお借りして、心からの感謝を申し上げます。



▲ふれあいの森はんのうら